

Sārasaṅgaha の再検討

伴 戸 昇 空

今回の発表は、佐々木現順博士の論文「パーリ原典 Sārasaṅgaha の発見」(大谷学報・54-2・昭和四九年)にもとづいて、そのいくつかの問題点を再検討したものである。以下、紙面の都合上、その要点のみを記す。

(一) 異本について

博士は、現在、六種の異本を用いて、本書の校訂中であるが、その後、新たに八種の異本の存在が明らかになった。それを列挙すれば次の如くである。

- 1 Sarasāṅgaho; ed. Y. Sarānanda, Colombo, 1898.
- 2 Sarasāṅgaho; ed. K. Dharmasiri Tissa, Wejitare, 1898.
- 3 Sarasāṅgaho; ed. Y. Somananda, Colombo, 1914.
- 4 Sarasāṅgaho; ed. N. Sunanda, Rangoon, 1916.
- 5 MS; British Library 所蔵。
- 6 MS; Bibliothèque Nationale, Paris 所蔵。
- 7 MS; Colombo Museum 所蔵。
- 8 MS; Bangkok National Library 所蔵。

出来得れば、これらをも合わせて校訂されることが望まれるであらう。

(二) 著者とその年代について

本書の著者は、その Colophon より、Buddhappiya の最後の弟子で Siddhattha とていふ名の長老であることがわかる。従来、

彼の生存年代は、その師 Buddhappiya の生存年代より推定されてきた。Buddhappiya の生存年代には二説ある。即ち Parakkamabāhu I (1153~1186 在位) の頃とする説と<sup>①</sup> Parakkamabāhu II (1236~1270 在位) の頃とする説と<sup>②</sup>ある。いずれの説をも著者<sup>③</sup>の Buddhappiya を Rupasiddhi と Pajjama-dhu の作者<sup>④</sup> Coliya Dipahkara とする点では一致する。<sup>⑤</sup>前説は彼の著書 Rupasiddhi の存在を、十二世紀半ば頃に作られたとされる Moggallāyana の著者が知っていたらしいという点に、その論拠を有するようである。しかし、次に示す二点から、後説の方がより有力であると思われる。

① Mahārupasiddhi, ed. D. Dharmaratana, Peliyagoda, 1901 (parted.) の序文に Buddhappiya を Bhuvanekabāhu I (1272~1284 在位) とつけた贅辭が残っているが、報告されている<sup>⑦</sup>。これによつて、前説は時間的に少しく無理があると思われる。

② Buddhappiya が Cola から彼の地に招かれたものと思われるのであるが、<sup>⑧</sup> Cūlavamsa とよめる Cola から比丘達を招いて大寺派の回復をはかるといふ記述は、たった一度しか見られず、その時期は Parakkamabāhu II の時のことである (Cv. p. 469, 第十偈)。

従つて、彼の最後の弟子と言われる本書の著者 Siddhattha は十三世紀後半~十四世紀前半頃に生存していたと考えられるのである。

(三) 章の数について

本書の章の数についても二説ある。三十九章説<sup>⑨</sup>と四十章説<sup>⑩</sup>である。

る。この二説の相違点は、四十章説で言うところの第四章 Cakkavattivibhavanakathā の存在を三十九章説では認めないということにある。しかし、現在、我々が見ることのできる本書は、明らかに四十章よりなり、Cakkavattivibhavanakathā という章は独立して存在すると考える以外にない。何故ならば、本書の Colophon の第一偈に、この書は四十章よりなることが明記されており、又、Matika にあって Cakkavattivibhavanakathā という章は明らかに一つの独立したトピックとして教えられているからである。

かえって、三十九章説を最初に提唱したと言われている Oldenberg の Catalogue (JPTS, 1882, pp. 125, 126) を見ると、彼自身は、決して、本書が三十九章よりなるとは言っていないことがわかる。そこには単に、各章名が列挙されているだけであり、それを合計すると三十九になるというにすぎない。故に、そのリストには、何らかの事情で Cakkavattivibhavanakathā という章名が脱落していると考えた方が妥当であろう。そのリストの不備に Neumann (Das Sārasaṅgaha, Leipzig, 1891) が誤解を重ねて、三十九章説と言われるに至ったもののように思われる。

猶、Matika と各章の書き出し部分の比較検討により、第七章・第八章及び第十二章・第十三章は本来、それぞれ一続きの章であった可能性が認められる。又、この可能性は、それらの章の記述内容からも支持されるようである。この点に関しては、いずれ機会を改めて述べようと思う。

#### (四) 引用について

本書は、諸パーリ聖典中より種々のトピック別に、その要綱 (Sara) を寄せ集めた (Saṅgaha) 引用集の如き体裁を持ち、説法

の参考書とでも言うべき性格の論書である。本書を通覧すれば、ほぼ各段落ごとの最初か最後に、そこに引用された文献の典拠が示されていることがわかる。その記述によると、本書に引用された諸典籍は、三藏・註釈・復註等、三十六種以上に渡っている。

又、本書に占める引用文の割合は極めて大きいと言える。例えば、本書中で最も大きな章である第四十章を調査すれば、その約 77% が、現在出版されている PTS の諸テキスト中にその典拠を見出だし得るという結果になる。力及ばずして典拠を発見できなかった様な箇所をも合わせ考えれば、本章のほぼ全文が何らかの文献からの引用文によって構成されていると言っても過言ではないであろう。さらに、その傾向が明瞭にうかがわれる例として、第十二章をあげることができよう。この章は、その記述の 95% 余りが *Sumaṅgalavāsini* (pp. 231 ~ 234, 305) からの忠実な転写によって構成されている。残る 5% 弱というのは Colombo 版 (1917) の行数にして四行程度であり、そこには章の導入部分と、典拠を指示する記述以外には何も認められない。この様な特性をもつ本書より、その思想的獨創性を指摘することは甚だ困難なことのように思われるのである。

総じて、本書中に、それ以前のいかなるパーリ聖典中にも典拠をもたないような獨創的な記述を見出すことは、容易なことではないようである。しかし、本書は、そこに扱われている四十種類のトピックに関して、諸聖典中にはどのような記述がみられるかという、その概要を簡便に把握するには、大いに有用なものである。故に、我々の期待すべき本書の価値は、この点にこそあると思われるのである。

(註省略)